

地域で学び地域と育つ 神山校

～ 中山間地の地域内循環モデルの構築 ～

中長期
ビジョン
(目的)

育成する地域人材像

- これからの「環境」「食農」等をめぐる感性と知識・技能を身につけた人材
- 様々な人と関わり合い、物事を推進することのできるコミュニケーション能力を持った人材
- 所属するコミュニティや関わった地域などのために貢献しようとする意欲を持った人材

これまでの取組

- ・ 保小中高連携(防災教育, 食育, 木育)
- ・ 地域連携(神山創造学, 課題研究, 高齢者支援)
- ・ IT活用と情報発信(民間企業との映像制作)
- ・ 産業の担い手育成(ファブラボを活用した部活動)

成果

- ・ 高校・町役場・地場企業の連携体制を構築
- ・ 多様な年代, 人との交流
- ・ 地域社会の課題を解決
- ・ 町による通学費や住まいのサポート

課題

- ・ 学習内容と進路先とのギャップ
- ・ 6次産業化のための施設整備

目標

生徒に習得させる具体的能力

- 自身の感情や考えを表現し, 発信する「伝える力」
- 多様な価値観を持つ他者と関わり, 物事を進める「協働する力」
- 体験から新たな課題を獲得し探究・解決しようとする「深める力」
- 「基礎学力」と環境・食農等に関する「専門的知識・技能」

システム

- 時代の変化とともに拡張する「環境」「食農」の概念を取り入れたカリキュラムの整備
- 生徒の期待と学習内容を持続させた進路の開拓
- 6次産業化の流れを学べる教育環境の拡張

【研究組織概要図】

研究開発

① 「神山創造学」の再構築

- ・ 「課題研究」の深化
- ・ キャリア教育の充実
- ・ 他教科等と相互に関連させた指導
- ・ 基礎学力の強化

② 地域性を生かした質の高い教育環境の整備

- ・ 外部人材を活用した「専門人材の配置」
- ・ 造園教育の概念と実践を学ぶ「スタディツアー」
- ・ 多様な進路を実現する「教育課程の構築」

③ 地域の生産・交流拠点の創出

- ・ 地域の種と苗をつなぐ「シードバンク」
- ・ 人とモノが行き交う「校庭マルシェ」

④ 地域を学びの場とした実践

- ・ 演習林を活用した「森林ビジョン」
- ・ 6次産業化を学ぶ「耕作放棄地対策」
- ・ 地域の景観保全を担う「石積み修復」

コンソーシアム

【管理機関】 徳島県教育委員会

城西神山校プロジェクトチーム

城西高校 神山校
神山町
(一社) 神山つなぐ公社
(株) フードハブ・プロジェクト

▲▲▲▲ 地域協働学習支援員

連携

地元企業、NPO、保育所、
小・中学校、大学 等

△△
△△
カリキュラム開発等専門家

運営指導委員会

ふりがな	とくしまけんきょういくいいんかい	ふりがな	とくしまけんりつじょうせいこうとうがっこうかみやまこう
管理機関名	徳島県教育委員会	学校名	徳島県立城西高等学校神山校

2019年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 実施体制の概要

1 管理機関・学校の概要

(1) 管理機関名、代表者名

管理機関名：徳島県教育委員会

代表者名：教育長 美馬 持仁

(2) 学校名、校長名、研究を実施する学科

学校名：徳島県立城西高等学校神山校

学科：普通科 専門学科 総合学科

校長名：小原 史明

2 取組内容

＜先進的な地域課題研究等の実績を踏まえた地域人材育成に資する発展的な実践＞

【研究開発名：地域で学び地域と育つ神山校 ～中山間地の地域内循環モデルの構築～】

※「事業を通じて育成する地域人材像」は、次のとおりである。

①地域景観の保全や希少植物の保護・増殖，安心安全な農産物の生産から6次産業化など，これからの「食農」・「環境」等をめぐる感性と知識・技能を身に付けた人材

②様々な年代や職種の人と関わり合い，物事を推進することのできるコミュニケーション能力を持った人材

③所属するコミュニティや関わった地域などのために貢献しようとする意欲を持った人材

※「卒業までに生徒に習得させる具体的な能力」は、次のとおりである。

①自身の感情や考えを言語化・ビジュアル化等によって表現し，発信する「伝える力」

②多様な価値観や背景を持つ他者と関わり，対話を通して物事を進めていく「協働する力」

③体験からの内省を通して教訓や新たな課題を獲得し，探究・解決しようとする「深める力」

④社会的・職業的自立に必要な「基礎学力」と環境・食農等に関する「専門的知識・技能」

3 管理・運営方法

(1) 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名	
徳島県教育委員会	教育長	美馬 持仁
徳島県立城西高等学校神山校	校長	小原 史明
神山町	町長	後藤 正和
一般社団法人神山つなぐ公社	代表理事	桴谷 学
株式会社フードハブ・プロジェクト	代表取締役社長	林 隆宏
徳島大学	学長	野地 澄晴
鳴門教育大学	学長	山下 一夫
大正大学	学長	大塚 伸夫
株式会社えんがわ	代表取締役社長	隅田 徹
Sansa株式会社	代表取締役社長	寺田 親弘
認定特定非営利活動法人グリーンバレー	理事長	中山 竜二
神山町林業活性化協議会	会長	後藤 正和
特定非営利活動法人里山みらい	理事長	佐々木 宗徳
神山町下分保育所	所長	山口 准子
神山町広野保育所	所長	林 美智代

神山町神領小学校	校長	楠 達也
神山町広野小学校	校長	寺奥 幹生
神山町神山中学校	校長	川口 徹

2016年度から2017年度にかけて組織していた「神山分校魅力化検討会議」は、校長、教頭、農場長、神山町、一般社団法人神山つなぐ公社（以下、神山つなぐ公社）、株式会社フードハブ・プロジェクト（以下、（株）フードハブ・プロジェクト）、地域住民で構成されていた。

2017年度から実施している学校設定科目「神山創造学」では、神山町内30ヶ所の事業所で行っている実績もあり、連携体制が既に構築されている。

本事業では、研究開発や専門性深化のため、連携内容を発展させるとともに、大学まで拡張して構成する。徳島県教育委員会と徳島大学及び鳴門教育大学は、既に連携協定を締結して連絡協議会も実施しており、他の機関とも連携の内諾を得ている。

（２）将来の地域ビジョン・求める人材像等の共有方法

コンソーシアムの連携強化を図るため、年間2回の会議を実施するとともに、学校行事、各種活動（オープンスクール、神農祭・収穫祭、課題研究発表会等）に積極的に参加してもらうことで実態の把握につなげる。

神山町内での共有は、神山町の創生戦略「まちを将来世代につなぐプロジェクト（以下、つなプロ）」の活動報告会（つなプロ報告会）や「国際交流プロジェクト報告会」での報告、神農祭（収穫祭）でのプロジェクト発表の実施を通して行っており、今後も継続する。

（３）コンソーシアムにおける研究開発体制

コンソーシアムにおいて、7月と1月に会議を開催するとともに、10月のオープンスクールにも参加してもらう。

地域との協働による探究的な学びを実現するカリキュラム開発を行うため、コンソーシアムとして以下の内容を学校と連携して取り組む。

①「神山創造学」の再構築

- ・「課題研究」の深化
- ・キャリア教育の充実
- ・他教科等と相互に関連させた指導
- ・基礎学力の強化

②地域性を生かした質の高い教育環境の整備

- ・外部人材を活用した「専門人材の配置」
- ・造園教育の概念と実践を学ぶ「スタディツアー」
- ・多様な進路を実現する「教育課程の構築」

③ 地域の生産・交流拠点の創出

- ・地域の種と苗をつなぐ「シードバンク」
- ・人とモノが行き交う「校庭マルシェ」

④地域を学びの場とした実践

- ・演習林を活用した「森林ビジョン」
- ・6次産業化を学ぶ「耕作放棄地対策」
- ・地域の景観保全を担う「石積み修復」

（４）カリキュラム開発等専門家（地域魅力化型・プロフェッショナル型）、海外交流アドバイザー（グローバル型）の指定及び配置計画

氏名	所属 職名	専門分野
尾崎 士郎	鳴門教育大学大学院 学校教育研究科	技術教育、木材加工 等

	高度学校教育実践専攻 特命教授	
安永 潔	四国大学 経営情報学部 准教授	前学校長, 農業教育 等
寒川 由美	徳島県教育委員会 学校教育課 高校教育担当 指導主事	高校教育, 教育課程, 地理歴史科教育 等
中川 望	徳島県教育委員会 学校教育課 キャリア・消費者教育担当 指導主事	キャリア・消費者教育, 農業・水産教育 等

カリキュラム開発等専門家として、4名を指定することで内諾を得ている。地域・学校の双方の視点を踏まえた企画、提案、指導、助言等ができる専門家であり、地域・学校の実態分析を通じたプロジェクトマネジメント等を担うに最適の人物である。

随時来校して授業や活動を見学し、地域・学校・生徒等の実態を把握した上で課題の分析を行うとともに、各教科・科目、分掌の担当教員や地域協働学習実施支援員と協議・調整を行いながらカリキュラム・マネジメントを進めていく。

(5) 地域協働学習実施支援員の指定及び配置計画

氏名	所属 職名 役割
森山 円香	一般社団法人神山つなぐ公社 理事・ひとつづくり担当, 城西高校神山校社会人講師, 地域協働学習実施支援員チーフリーダー
秋山 千草	一般社団法人神山つなぐ公社 ひとつづくり担当
梅田 學	一般社団法人神山つなぐ公社 ひとつづくり担当
樋口 明日香	株式会社フードハブ・プロジェクト 食育係・パン先生, 城西高校神山校社会人講師

地域協働学習実施支援員として、神山つなぐ公社ひとつづくり担当と(株)フードハブ・プロジェクトの4名を指定することで内諾を得ている。学校設定科目「神山創造学」や「生物活用」の授業の企画・実践・評価に直接関わる。現在も週に2回来校し、授業の準備会議を行っており、地域や大学や専門機関との専門人材をつなぐコーディネーター役も担っている。

各教科・科目、分掌の担当教員やカリキュラム開発等専門家と連携を図りながら「神山創造学」を含む地域連携授業の企画・実施を行う。また、「校庭マルシェ」等授業外の取組についても必要なコーディネートを担当する。

(6) 運営指導委員会の体制

氏名	所属 職名	専門分野
前田 洋一	鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 高度学校教育実践専攻 教授	カリキュラム開発, 学校組織マネジメント 等
鎌田 磨人	徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授	生態系管理工学 等
向井 理恵	徳島大学大学院社会産業理工学研究部 准教授	食品科学, 栄養科学 等
松山 隆博	徳島文理大学 保健福祉学部 准教授	地理歴史科教育, 人権教育 等
高田 研	都留文科大学 教養学部 特任教授	環境教育学, 人文地理学 等
隅田 徹	株式会社プラット・イーズ 会長	デジタルコンテンツサービス 等
大南 信也	認定特定非営利活動法人 グリーンバレー 理事	神山町への各支援 等
高橋 博義	神山町教育委員会 教育長	
久保 素弘	学校評議員	城西高等学校元校長

湊 雅邦	徳島県教育委員会学校教育課 キャリア・消費者教育担当 室長	キャリア・消費者教育, 高校教育, 数学科教育 等
------	----------------------------------	------------------------------

管理機関主催の運営指導委員会を年間2回開催し、事業報告と事業内容の自己評価について、各専門の立場から指導助言を受ける。

(7) 研究成果報告・事業成果の検証に向けた計画

- ・運営指導委員会において、研究成果中間報告を10月に、最終報告を1月の課題研究発表会後に実施する。研究内容の進捗状況、方法等について専門的見地から指導助言を受ける。
- ・県教育委員会の担当指導主事等から指導助言を受ける体制を構築する。
- ・課題研究発表会を開催し、2年生プロジェクト活動報告、3年生課題研究発表を実施する。
- ・全国サミットに参加して研究内容を発表し、参加者から講評を受ける。
- ・研究成果を、課題研究報告集に記録する。

(8) 管理機関又はコンソーシアムによる主体的な取組・支援

- ・管理機関である徳島県教育委員会は、事業全般を見通しての指導や事業の管理を行うとともに、大学との連携や研究開発において方向性を提案する。
- ・コンソーシアムの構成組織である神山町は、町単独予算による町外通学生対象に通学補助を行ない、神山つなぐ公社、(株)フードハブ・プロジェクトを通じて、授業のカリキュラム開発と実施、授業外活動の企画と運営、学校案内パンフレットの共同制作、特設ページの制作等の支援を行なってきた。本構想である発展的取組を実現させるため、これまでの支援を継続して行うとともに、県外等遠方者からの入学生を受け入れるための住まいの整備にかかる業務を行い、また入学生への補助を行う予定がある。
- ・大学は、研究開発において専門的見地から指導助言を与える。
- ・神山町内の企業やNPO法人は、生徒のフィールドワークや仕事体験等を継続支援する。

(9) 事業終了後の継続的な取組の実施に向けた計画

カリキュラム開発等専門家の配置については、事業終了時点のカリキュラム開発等の状況を鑑みて、検討を行う。

地域協働学習実施支援員4名は、これまでも「神山創造学」及び地域連携授業を外部講師や支援スタッフとして担ってきた。事業終了後においても継続して授業を担当する予定であるが、学校と連携を図る地域組織にその経験値を蓄積し、引き継いでいけるようにする。

2019年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

指定期間	ふりがな	とくしまけんりつじょうせいこうとうがっこうかみやまこう				②所在都道府県	徳島県
2019～2021	① 学校名	徳島県立城西高等学校神山校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	④に同じ 全校生徒81名 2019年度入学生からは、地域創生類とし募集した。	
造園土木科		18	19		37		
生活科		8	7		15		
地域創生類	29				29		
⑥研究開発構想名	地域で学び地域と育つ神山校～中山間地の地域内循環モデルの構築～						
⑦研究開発の概要	<p>持続可能な社会形成を図る地域の担い手を育成するため、次の研究に取り組む。</p> <p>①「神山創造学」の再構築、 ②地域性を生かした質の高い教育環境の整備、 ③地域の生産・交流拠点の創出、 ④地域を学びの場とした実践</p>						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>(目的) 事業を通じて育成する地域人材像</p> <p>①地域景観の保全や希少植物の保護・増殖、安心安全な農産物の生産から6次産業化など、これからの「環境」、「食農」等をめぐる感性と知識・技能を身につけた人材</p> <p>②様々な年代や職種の人と関わり合い、物事を推進することのできるコミュニケーション能力を持った人材</p> <p>③所属するコミュニティや関わった地域などのために貢献しようとする意欲を持った人材</p> <p>(目標) 卒業までに生徒に習得させる具体的能力</p> <p>①自身の感情や考えを言語化・ビジュアル化等によって表現し、発信する 「伝える力」</p> <p>②多様な価値観や背景を持つ他者と関わり、対話を通して物事を進めていく 「協働する力」</p> <p>③体験からの内省を通して教訓や新たな課題を獲得し、探究・解決しようとする 「深める力」</p> <p>④社会的・職業的自立に必要な「基礎学力」と環境・食農等に関する 「専門的知識・技能」</p>					
		<p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>昨年度は、「造園土木科」と「生活科」の2学科で地域と連携した取り組みを実践してきたが、今年度より「地域創生類」として一括募集し、2年生から「環境デザインコース」と「食農プロデュースコース」の2コースに分かれて学習を行う。2017年度から学校設定科目「神山創造学」を開講しており、神山町内のフィールドワークや仕事体験を中心に地域での学びを実践している。生徒の意識が変わりつつあるが、学んだことが卒業後の進路に生かしていない現状がある。</p> <p>[仮説1] 生徒は「神山創造学」等の学びを通して、これからの「環境」、「食農」等をめぐる感性と知識・技能を身につけることができる。</p> <p>[仮説2] 生徒が地域に出て行き、地域の様々な職種や年代の人との交流することにより、物事を推進することのできるコミュニケーション能力が身につく。</p> <p>[仮説3] 「神山創造学」を初めとする様々な教育活動に主体的に取り組むことにより、地域の課題を実感し、地域社会に貢献しようとする人材を育成できる。</p>					

⑧- 2 具 体 的 内 容	<p>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p>① 「神山創造学」の再構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「課題研究」の深化 ・ キャリア教育の充実 ・ 他教科等と相互に関連させた指導 ・ 基礎学力の強化 <p>2017年度から開講している学校設定科目「神山創造学」では、生徒が町内のフィールドワークを通じて、歴史・文化・暮らし・産業などの調査を行っている。地域の将来を見据えた施策を行う行政や地域住民らと協働して、課題解決に向けたプロジェクト学習に取り組み、さらに「課題研究」に発展できるよう深化させる。他教科等と相互に関連させた指導を行いながら、基礎学力の強化を図るとともに職業体験を取り入れ、生徒の職業観を育成する</p> <p>② 地域性を生かした質の高い教育環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 外部人材を活用した「専門人材の配置」 ・ 造園教育の概念と実践を学ぶ「スタディツアー」 ・ 多様な進路を実現する「教育課程の構築」 <p>各コンソーシアム構成組織の有するネットワークを活用したゲスト講師を招聘する際の人選への協力や、環境や農林業についての考え方を深めるスタディツアーを実施して指導者の専門性を高める。また、カリキュラム開発等専門家の指導助言を受け、学校全体の教育の質を高める。</p> <p>③ 地域の生産・交流拠点の創出</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の種と苗をつなぐ「シードバンク」 ・ 人とモノが行き交う「校庭マルシェ」 <p>地域でつないできた種苗を保管し、交換しあえる場所を高校内に設置する。また、農産物や種苗、情報を交換する場所として、本校芝生グラウンドを定期的に開放し、人が交流できる場所として提供する。そして、コンソーシアムの協力を得る。</p> <p>④ 地域を学びの場とした実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 演習林を活用した「森林ビジョン」 ・ 6次産業化を学ぶ「耕作放棄地対策」 ・ 地域の景観保全を担う「石積み修復」 <p>学校の演習林や、町内の耕作放棄地、高齢者宅や石積み修復を学びの場として、教科書や実習で学んだことを生かした様々な取組を行う。専門講師等の教えを元に、これからの「環境」、「食農」等をめぐる感性と知識・技能を身につけた人材を育成する。</p> <p>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</p> <p>本校では、2017年度までは、カリキュラムや学校の在り方に関する研修は特に実施してこなかったが、学科再編に向けて2018年度に実施した3回の研修は効果があった。学習内容の充実を図っていくために、地域資源を教育的目線で捉え直し、カリキュラムデザインを行っていくことが必要であると考えた。今後は、先進校の講師招聘やスタディツアーを組み込んで継続する計画である。また、カリキュラム開発等専門家と教職員とで協議と実践、振り返りの場を定期的に重ねてカリキュラム開発を行う。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等</p> <p>特になし。</p>
⑨その他 特記事項	特になし